

女による
女のための

R 18 文学賞

決定発表

主催 株式会社新潮社

応募総数980作の中から選ばれた最終候補作5作のうち、新たに選考委員となった窪美澄さん、東村アキコさん、柚木麻子さんによる協議の結果、上村裕香さんの「救われてんじやねえよ」が大賞を受賞しました。また、タレントの友近さんの選考により、「いい人じゃない」が友近賞に決定しました。

大賞

『救われてんじやねえよ』
上村裕香

(応募時ペンネーム…上村ユタカ)

友近賞

『いい人じゃない』
古池ねじ

沙智にとっての、その日の天使

作家の中島らもさんが「その日の天使」というエッセイのなかで「二人の人間の一日には、必ず一人、『その日の天使』がついている」と書かれました。少し長いですが、引用します。

心・技・体ともに絶好調のときには、これらの天使は、人には見えないものようだ。逆に、絶望的な気分にならざるには、この天使が一日に一人だけ、さしつかわされていることに、よく気づく。こんなことがないだろうか。暗い気持ちになって、冗談にでも、「今、自殺したら」などと考えているときに、とんでもない知人から電話がかかってくる、あるいは、ふと開いた画集が何かの一片の絵によって救われるようなこと

上村裕香

やってきたこと

学生の頃、よく作家の講演会に行きました。質疑応答のコーナーでの定番の質問は「小説家志望の人へアドバイスは？」です。たいていの作家さんは同じことを答えていました。「書き続けることです」

今よりさらにひねくれていた私は「みんな同じことしか言わないな」と思っていました。でも今聞かれたら、私もそう答えると思います。昔からまっとうな努力が嫌いで、人や自分と向き合うことを避け、ろくに勉強もせず、あまり本も読まず、書きたかったけれど諦めた構想や書き始めたけれど続けられなくなった小説を大量に抱えています。それでも書き続けていまし

が。それは、その日の天使なのである。(中島らも『その日の天使(人生のエッセイ)』日本図書センター、二〇一〇年)

本作「救われてんじやねえよ」におけるその日の天使は、小島よしおです。絶望してどうしようもなくなつたとき、真正面から向き合ってくれる大人は必ずしも救いにはならない。地獄から沙智を掬いあげられるのは、深夜の一発屋傑作選で「オツパッピ」って言っている半裸の大人かもしれない。そんな思いで書きました。もし面白いと思っただけでしたら、笑ってください。笑いで、救われることもあるでしょうから。

上村裕香

古池ねじ

た。具体的な目標があつたとか、ただ楽しかったとか、そういうはつきりした理由もなく、目覚ましい才能も勤勉さもなく、他にも色々欠けたまま、それでも書き続けて、なんとか小説家になり、今回この賞をいただくことができました。本当に、本当に嬉しい。

書き続けることを支え、励ましてくれた方々。今回この機会を与えてくれた方々。すぐに顔が浮かぶ方も、顔も知らない方もいます。私が思い至らないような場所で支えてくださった方もたくさんいるでしょう。すべての方に感謝をしています。本当にありがとうございます。書き続けます。



(かみむら・ゆたか)

2000年佐賀県佐賀市生まれ。京都芸術大学芸術学部在学中。趣味は道徳の教科書を読むこと、将棋観戦です。

(こいけ・ねじ)

愛知県出身。東京都在住。文筆業。既刊二冊。推理小説が好きです。

選評

過去最多を数えた応募作の中から抜け出た、粒ぞろいの最終候補作。どれも佇まいの異なる5作品に選考委員は侃々諤々の議論を尽くし、他に類を見ない爆発力を放つ大賞受賞作が決定した。
写真：曾根香住



窪美澄

東村アキコ

柚木麻子

窪美澄

高いバーを
軽々と超えて

初めて選考委員というものをやらせていただいて、誰かの作品を選ぶ、選評する、ということがこんなにも恐ろしいことだと思ひ知った。

なぜなら、最終選考に残った五作品のレベルがあまりに高かったからだ。自分がデビューした賞なので、言いにくいことではあるが、これまで大賞をとられた作品の文章力のレベルの高さは、ほかの賞から頭ひとつ、ふたつ出ていると常々思っていた。けれど、今回の五作品はどれも、なにかの小説誌の短編集に組み込まれていてもならん不思議ではなかった。

文章力、人物のキャラ設定、物語の運び、構成力……そこを選考会であえて論じる必要がないほど、小説としての基礎体力は高かった。その高いバーを軽々と超えた各候補作の、何に着目したか。そ

れぞれの作品で語っていききたい。

●『わらいもん』

やや会話文が多いのかも、という気もしたが、それでも、その会話をもつと読みたい、という衝動にかられた。そこはかとない哀しみやおかしみ、というものが作品全体から滲み出ている。一見、脱力しているように見えて、物語の構成力は緻密で、推進力は強い。ただ、本当に申し訳ないのだが、私自身がお笑いにくわしくはないので、登場する焼き鳥バターフライのおもしろさが理解できず、小説のなかの漫才シーンに笑うことができなかった。それでも、笑いを描くこと、しかも高校生が漫才を作り、演じる、という描写はとつともなく難しいが、あえて、そこに挑戦した作者には拍手を送りたい。

●『ユスリカ』

タイトルがまず秀逸である。ただ、「多様な生き方」「ダイバーシティ」という言葉が幾度か登場するが、その言葉が物語にうまく混ざりきれていない気がし

た。この言葉を使わずとも、この物語のおもしろさは発揮できたはずだ。墓参りという地縁、血縁を象徴するような行動との比較があるのかとも予想したが……。とはいえ、さららのキャラは、ずば抜けておもしろく、後半、物語がもつと暴走して、作者も予想しない方向に広がっていく可能性は、幾通りもあったのではないかと思つた。

●『海のふち』

鮮魚市場のシーンも春江のキャラも抜群にいい。ちゃんと潮の匂いに満ちた場所を描けている。すでに連作短編の長い構想があるのではないかと思つてしまつたのは、この端正な作品にやや整いすぎた弱さを感じてしまつたせいかもしれない。磨きあげた作品だというのは十分に伝わった。くり返すようだが、そこで削ぎ落としてしまつたものもあるのではないか。一見無駄だ、と思える文章のなか



に物語の芯が含まれている、ということも多い。だが、これも、この作品に「あえて言うなら」の範疇である。この先をもっと読んでみたい、という感想をいちばん強く持った作品でもあった。安定感という意味では五作品のなかで一番であった。

●『いい人じゃない』

「あの人、いい人じゃない？」（肯定）と世間で言われているような人が「いい人じゃなかった」と反転することを描いていて、なんとも小気味良い作品なのだが、もしかしたら、書き手がその構成にあまりにこだわり過ぎてしまったのではないか、という感想を抱いた。遠山のキャラはすばらしいが、マルチ、というのがちよつとありきたりな気がしてしまつたのも事実。それ以上に、彼女の破天荒な悪行ぶりを、そして、それに翻弄される美沙をもっと読んでみたいという気になつた。

●『救われてんじやねえよ』

そして、今回大賞に選ばれたのがこの作品である。

五作品のなかで最も殺傷力の高い文章を書かれる方だった。そういう方がこのテーマで絶望を描くのだから、読み手にも覚悟がいる。プロの書き手であつたら、ラスト、かすかな希望や光でお茶を濁したかもしれない（あるいは編集者から言われて）。

でも「救われてんじやねえよ」である。「救われてんじやねえよ」と書き手がいい、「救われてんじやねえよ」と読み手に絶叫しているのである。

どうしようもなく書かざるを得ない衝動を持つた方なのだと思う。

ただ、ほんの一瞬、「今、こういう作品を真つ正面から受け止めることのできる読み手が、どれくらいこの世界にいるのだろう」と思つてしまつた。そんな余計なお世話だよ、と言われてしまいがただが、読み手の胆力を問うような緊張感と切れ味をこの作品は内包しているからだ。また、こういう作品は書き手の内側も削いでいくと私は思う。そんなことまでも心配してしまつた。

最終選考に残り、大賞をとつたからに

は、必ず一冊の本に仕上げしてほしいし、小説家としてできるだけ長い間、活躍してほしいと思つている。そこまで考えてしまつたのは、この方がすでにゴールテープのその先を走っているからである。デビュー作は怖い。自分でも意識しないものが、にじんできてしまうことが多い。いつか「救われてんじやねえよ」と自身身に言う日が来るかもしれない。それでも、書き続けてほしい。そう強く思つた。

選考を終えて、選評を書いている今も、これでよかつたのか、と思う日々が続いている。

自分の過去を振り返つてみても、どれほどの熱量で皆さんが応募したのか、それがわかるからだ。「私の作品のことなどまつたくわかつてない」と罵倒してくださつてかまわない。けれど、私たちは見つける。それは光に透かしてやつと見えるほどの細い糸かもしれない。それでも、私たちは必ず見つけてみせる。

「さあ！ 次の作品を書こう」と簡単に

思えないことも知っている。書き始めても、「いつたい賞をとつて、小説家になつてなんになるの!？」と真顔になることもあるだろう。

正直なことを言えば、この時代、小説家になつても、人生が反転するようないいことばかりが起こるわけではない。むしろ逆のほうが多いかもしれない。小説を書かなくてもいい人生、そのほうが、幸せに生きていけるのかもしれない。それでも私は書く。書かないと生きてはいけない。そういう人の登場を私は待つている。そして、もつともつと徹底的に私を打ちのめしてほしい。

東村アキコ

キャラクターと

テーマ

今回が初めての小説新人賞の選考会でしたが、全体的に、すごく読みごたえのある、ずつしりと重たい作品が多くて驚きました。短編なのでさらっと読めるかなと思つていたのですが、いい意味で読

むのに時間がかかり、選考会までに充実した読書タイムを過ごせました。私は寝る前にほぼ毎日、時代を問わず女性作家の小説を好んで読むのですが、R・18文学賞は女性が書き手ということで、その意味でも選考を楽しみにしていました。「わらいもん」は候補作の中で一番、情景が映像として浮かびました。漫画家としてはまずキャラクターの顔が思い描けるかが、話に乗れるか否かというところで気になる点ですが、中野とニシダの顔はぱつと浮かんで、頭の中で映画のようにストーリーを繰り広げてくれました。読んでいて元気になりましたし、私の中では最も評価が高かつたです。タイトルも二つの意味で取れるのがすごくいいなと思いました。

小説の中の漫才で笑いをとるのはすごく難しいので、笑えなくてもいいと作者は考えて書いていると思いますが、システム漫才に女子高生がチャレンジするのがとてもリアルでした。関西弁だと、海原やすよともみみたいな漫才をするのかなと思つていたのですが、きつちり、今

の主流である言葉遊びのシステム漫才に挑戦していたところが良かつたです。

「救われてんじやねえよ」は読んだ後、すごくショックを受けた作品でした。良くも悪くも引きずりました。大学時代、文学の授業で中上健次の全作品を読み、心がずんと重くなつた経験があるので、それが、その時と似た印象を受けました。それは著者の才能です。好き嫌いの分かれる作品かと思えますし、私はいつも楽しい漫画を描いていきたいという人間なので、こういう作品を読むとブルーになつてしまうのですが、それはつまり、作者が読者に影響を与えられる才を持つているということだと思います。

父親がカメラを二回目に買った場面では本当に打ちのめされてしまつたものの、だからこそ読み返してしまつたので、選考会でこの作品を受賞作に、となつた時も、私が受けたショック、パワーというのが、賞にふさわしい、受賞すべき作品なのだと思います。

「ユスリカ」は文章がきれいで読みやすく、マスクの使い方も今ならではのもの



で、面白かったです。ただ主人公の顔が見えてこそ、キャラクターが具体的に浮かばなかった。美人なのかそうではないのか、自分に自信があるのかそうではないのか。まあまあ、あるのかな、とは思ったのですが。

塚原くんはナンパされてすぐにキスさせられたりするので、それなりに素敵な見た目なのか、とか、いや、見た目は関係なく最近の若者はキスをするものなのか、とか、そのあたりが私にはよくわからなかったです。登場人物の行動がキャラクターによるものなのか、時代によるものなのか、そこはきちんと書いてもらわないとわかりません。今回はキャラクターの解像度が上がった作品を読みたいので。

「海のふち」はラストが候補作の中で一番好きで、感動しました。忘れられないラストでした。文章もさつくりと読みや

すく、すごく才能のある方だと思えます。その分、上手すぎて個性の見えないタイプの作者で、でもそれは欠点ではなく、個性を見つけなければいけません。自分が書ける独特のものを探さなければいけません。それは簡単なことだと思います。そうしたら無敵なのではないでしょうか。

あと、読者を楽しませようという工夫が感じられ、エンタメ的な要素がいろいろと盛り込んであるのが私としては嬉しかったです。新人のときから、自分が書きたいことを書くという一方通行ではなく、読者を楽しませよう、盛り上げようという気持ちが伝わってくるのは大切なことです。

脱獄犯については、日本だと牢破りの脱獄というのは相当難しいので、一度しつかり調べて、移送中の車からトイレに行くときに逃げるとか、具体的な事例に基づいて書いたら、もう少しリアリティがあつたのかなと思います。また脱獄と冤罪の結び付けが、読者を楽しませようと思つてやっているのはわかりますが、ややチープなので、そこに具体性があれ

ばまた違ったのではないかとというのが、漫画家としてのアドバースです。

「いい人じゃない」はどんでん返しのオチもあり、レベルが高いなと思いました。「面白いよ」と人に薦めやすい作品です。主人公も遠山さんも美沙も、顔や服装が鮮明に浮かび、映像が脳内で繰り広げられました。

ただ、主人公が、自分を心配してくれているのに実はその気持ちを誠実に受け止めていない美沙と、自分をカモにしようとしているのにむしろ気楽な友情を感じてしまう遠山さんという、友人二人を立てている矛盾やあべこべなところが面白いのに、美沙が主人公の元夫と不倫するとその設定が吹き飛んでしまうので、そこは構成をもう一声考えてほしいかったです。

また、遠山さんがマルチ商法に関わっていることは最初からわかっていたので、それはわからないように書いたほうが良かったと思います。遠山さんは、彼女を使つてもう一本書いてほしいと思えるくらい魅力的なキャラクターでした

が、再度書くとしたら「遠くの肉親より近くの他人」というようなテーマをきちんと決めるべきで、それが作者に希望するところですよ。(談)

柚木麻子

総じてレベルが
めちゃくちゃ高い

初めて選考をつとめさせていただきますが、全作品、レベルの高さに本当に驚きました。

受賞はルール上一作品となりますが、私はいずれの作品にも高評価をつけました。その差はごくわずかなものと思つています。今回、受賞に至らなかったみなさん、いずれも、ほんの少しのアップデートで、プロとしておおいに活躍できるレベルの方だと思います。自分が何度も応募に落ちてきたから声を大にして言いたいのですが、書き続けていただくことを心から望みます。

「わらいもん」受賞作品との評価の差は僅かです。ひらがなの使い方、街の描

写、物語の運びのたくみに、どこか田辺聖子作品を思い出させるほどの、きらめきと普遍性を感じました。キャラクターの魅力や会話の軽妙さも忘れられず、すぐにでもベストセラーを出せる、多くの読み手に愛される天性の資質の持ち主だと感じました。

ニシダが考えた「まぎ(わ)らしい」も女子高生が考えたネタとして無理がない上、ちゃんと面白い。反面、焼きバタの魅力や本番のネタの笑いどころが読者に伝わりにくいようにも思います。細部までのリアリティに目が行き届けば、さらに完成度は上がると思いますが、大きな欠点ではありません。

「救われてんじやねえよ」読んだ瞬間、これが受賞作だとすぐにわかりました。我々の想像力の限界をナイフでメッタ刺しにするような切迫感があり、私からこれまで一度も読んだことのない物語だからです。ニュースを読んで思いを馳せたその先にある景色を、においや色などの細かなディテールで一気に浮かび上がらせる力が凄まじい。簡単には救われな

い、その代わりに簡単な絶望もない。メディアで知る悲劇は当事者にとつてはただの日常であることを、強く認識させてくれました。母親を支える時に人という字の形にさえなれない描写は圧巻です。

物語の持つ暗さはむしろ現状に希望を見出せない人への肯定になると思えました。セーフティネットからこぼれおちそうな家族を描くことで、女性が受ける抑圧と現代社会の課題をつまびらかにしている。R・18文学賞にもつともふさわしい作品であると判断しました。受賞、心よりおめでとうございます。

「ユスリカ」たぶん、この物語の真価がわかるのは今から十年後と思います。主人公には恋人も塚原くんの姿も終盤まで正しく見えていません。それは、モテる主人公の贅沢なモラトリアムであるともとれるでしょう。しかし、全てはマスクで顔を半分隠して、においもお互いの気配も希薄、さらに距離をとって接しているからなのです。コロナ禍での、もやもやけぶつたような人間関係や空気を、ここまで正確に言語化していること

は、書き手として尊敬に値します。

無数の選択肢の前で立ち尽くす、主人公の心と身体のポイントをピタッと合わせしてくれる、さらさらという存在が俄然せり出してくる展開は見事です。塚原くんのずるさを通して見えてくるさららの強さ、主人公との連帯の可能性が、私はたまらなく好きです。であればこそ、さららをもう少し早く登場させ活躍させても良かったのではないのでしょうか。でも、ぼんやりと定まらない男達のパートをもっと削り、さららとの日常からの逃亡劇の方をこの精密さでもっと読みたかったなと思わせるのは、欠点というよりも作者の意図が成功している証だとも思うのです。

「海のふち」 何度も推敲したことがわかる、研磨されつくした宝石のような物語で、作者が書くことには真剣で、命を注いでいるか、ひしひしと伝わりました。子を失った女性と脱獄犯の行きがかり上の同居、というやや荒唐無稽な展開も違和感なく飲み込ませる手腕は素晴らしいと思いますし、骨の味わいやざら

つきがごく自然に伝わって来る描写も優れています。欠点はそぎ落とされ、入念にふるいにかけられています。だからこそ、もしかすると、その真摯さによって、作者の個性や情熱までそぎ落とされてしまつて、美しくまとまりすぎてしまつたのかな、とも思うのです。

この物語を何度か読み返すと、文章も構成も巧みで一見そうとわからないのですが、展開のスピーディーさや奇想天外さ、ぶつとんだ部分、読者へのサービスピエンスの豊かさに気がつきます。もしかすると、それこそが、作者の個性なのかもしれない。作者の描くべきは、淡いグラデーションからなる一色の織物ではなく、読者の光も影をも照らし出す、ミラーボールのように多面体でダイナミックな物語なのかもしれません。

「いい人じゃない」 コロナ禍を生きる私に、最も欲しているものを与えてくれた、苦いけれど豊かな味わいの物語であると思えました。「いい人じゃない」誰かとの、楽しくて尽きない会話。信頼には値しないけれど、何故か芯を喰つてい

る勵まし。美味しくないのに居心地がいい喫茶店みたいです。私だけではなく誰かが、遠山さんとの時間が今一番必要なのではないか。読者は、ああ、こういう人間関係で救われた部分がかつてはあったんだよなあ、と愛おしく、懐かしく思うのではないのでしょうか。

いわゆる「面白い女」が好きな元夫が、「面白い女」が面白くなくなった瞬間の残酷ぶりも、クズ男のバリエーションが広がったようで、読んでいてわくわくしました。であればこそ、美沙のキャラクターが古典的なのが惜しい気がしますが、一見穏やかなフレネミー女性には既視感があります。美沙と元夫との浮気によつて、「面白い女」が面白くなくなつたらどうでもよくなる、という元夫の個性が削られてしまつた上、比較対象にある美沙の凡庸のせいで、遠山さんのさめくような悪さにも翳りが生まれたよう

に思います。作者の苦さも生きる充実も伝わってくる文章にふさわしい、複雑な旨味あるキャラクターを作り出すことが、課題であると思います。

友 近 賞 選 評

友 近

面白い女

「いい人じゃない」を友近賞に選びました。ストーリーがいちばん素直に、すんなり入ってきたのがこの作品です。

主人公の女性の「正義感」が、どこか自分と似ているなと思いつながら読みました。いや、おそらくこの主人公は、「正義」でやっているという意識があるわけでもなく、ただ思った通りに行動しているという感じなのでしょうが、そこも私と似ています。彼女は、入社して一カ月しか経っていない会社で、先月の給料計

算がおかしいと、他の新入社員や総務部長の目の前で堂々と主張するような人物です。そういうのって皆なかなか言えないですけど、気づいたことは普通に言える人っていいよな、と思います。そして、そういう主人公に惚れる男が出てくるのがまたいい。しかも、なんだかチャラそうなその男が、主人公を「面白い」と言つて興味持っただけじゃなく、結婚までするので、徹底しています。結局、この男の浮気によつて離婚するわけですが……。

この作品に出てくる人物たちは、タイトル通り、みんな「いい人じゃない」。中でも主人公が、ずっと薄ら笑いしているようなのが好きでした。みんなそうなんですよ、という目で周りを見ている感じ。美沙という友達、元夫と浮気しているにもかかわらず主人公と付き合い続けているのは、犯人が犯行現場に戻つてくると似たような心理かもしれないですね。(芸能リポーターの)井上公造も「何かスキヤンダルがある人ほど自分から声かけてくる」つて言うてましたし。

主人公はきつと、「この女、私の旦那と浮気してるのに私とずっと友達でいるつてどういう神経なんやろ」と思いつつと美沙と付き合っている。人の弱みを握りながら生き続けている女というの、も、やっぱり面白いなと思えました。心臓によくないし、生きていく上では体によくないことのような気がしますが、近くにいると、毎日観察できるからおもしろいやるな、とか思わず考えてしまいました。

大賞受賞作の「救われてんじやねえよ」も文章がとても読みやすく、なおかつ印象に残った作品です。主人公が先生に「修学旅行は行けません。うち、貧乏やもん」と話すシーンを読みながら、自分が学生だったとき、修学旅行とかに参加しない子つてなんぞなんやろ、と思つていたことを突然思い出して、いろいろ考えてしまいました。あの子の家にも、何かがあつたのかもしれない、と。娘である主人公と、お母さんとの会話、とくによかつたです。(談)



救われてん じゃねえよ

上村裕香

花村信子 画



第21回
R-18
文学賞
大賞
受賞作

築五十年、八畳二間のアパートで、

わたしは難病の母を

一人で介護しながら高校に通う。

散財癖のある父、

真っ当だが頼りにならない担任、

恵まれた生活を送るクラスメイト……。

ハイレベルな作品が並ぶなか、

選考委員からの強い支持を集めて受賞。

救うことも救われることも容易ではない。

想像の先にある現実を描いた衝撃作。

膝を立てて布団に座ったお母さんの背中に、正面から抱きつくようにして脇の下から手を回す。背中の後ろで両手を組む。

顔と顔の距離が近い。お母さんはしきりに文句を言っている。最近一段と滑舌が悪くなってきた。口臭がひどい。足元の布団は冷たく湿っている。お母さんがまた漏らしたんだろう。いち、にの、さん。声をかけながら後方に体重をかける。お母さんの両腕がわたしの首に回っていて、負荷がかかる。上に持ち上げようとするのではなく、患者を引き寄せるように。ネットで見た立ち上がり介護の注意書きを思い出しながら、ゆつくりと二人立ち上がる。お母さんの両足が床につく。二人向かい合って立つ。二十センチの低反発マットレスは寝ていることの多いお母さんのために買った。立つ場所としては心許ない。お母さんの足が震えている。「もういいね、いいよね、行くよ」と強引に脇の下に腕を回す。

お母さんとわたしはほとんど背丈も体格も変わらない。百五十センチくらい。お母さんが足を引きずるようにして壁とわたしにすがりついて歩き出す。壁にかけていた時計に頭が触れそうになる。とつさにガードしたらお母さんのほうがバランスを崩してしまつたらしく、壁に思いつきり頭を打ち付けている。音は鈍かつたけれど、大げさに痛がつている。「ごめんごめん」と謝る。

はじめに起き上がらせようとしたときは腕を無闇に引つ張つて散々文句を言われた。深夜三時のテンションも相まっておんぶしようとしたこともある。そしたら二人して派手にひつ転んで、音を聞きつけたお父さんがやってきて颯爽とお母さんをトイレまで連れていってくれた。わたしは安心して布団に戻り、それならば

じめからお父さんがやってくれればいいじゃんと思痴を言いながら寝た。でもその一回以来、お父さんがお母さんのトイレに付き添ってくれたことはない。

やつとのことでトイレまでたどり着き、お母さんを便器に座らせて、ドアを閉める。時計を見ると明け方の四時だった。窓の外では雨が降り続いていた。朝になれば霜が降りるだろう。築五十年のアパートは八畳一間でユニットバス以外に個室がない。背後からお父さんの大きないびきが聞こえている。ユニットバスの中から「さつちやーん」とわたしを呼ぶ声がする。うんざりしながらドアを開ける。膝までズボンを下げたお母さんがいた。

「パンツ下がらんのお」と助けを求めた上目遣い。目やにがびつしりについていて、拭ってやりたいようなもう視界に入れることすらしたくないような気持ちになる。手が震えるのも症状の一つ。お母さんのパンツに手をかける。腰を浮かせるタイミングを見計らってパンツを少しずつおろしていく。おむつの代わりに使っている生理用品型の吸水パッドは汗とおしっこを含んで重くなっている。ずりおろす瞬間のせーのという掛け声がばからしくて少し笑える。お母さんも「せーの」と一緒に口を開いて、舌が変な色をしていたのが目に入った。手が止まる。お母さんの太ももに吸水パッドがべちゃりとつく。お母さんが不快そうに眉をしかめる。なんしよん、と呂律の回らない口で不満を言う。口をもごもごと動かす。その口端から青色のよだれが一筋垂れる。「ブルーレットの詰め替え用飲んだ?」

「飲むわけないやん」
「でもすごいどぎつくてちよつと澄んだ感じの青色してるよ。ち

よつと泡立つてる感じとか、ところどころ濃くなつてるところとかめちやくちやブルレットだよ」

「飲んでないってえ」

お母さんが話すたびに口から青色がのぞく。わたしはそれをしげしげと観察した。やはり着色料の入ったタイプの青色だった。トイレの芳香剤がどのくらい減つてゐるか確認する。うちはそもそもマジックリンだった。

お母さんのパンツを膝下までおろす。恥ずかしそうにおしっこしている。パンツを下ろされたのならおしっこしてるのを見られるのもはや同じだろうと思うのだが、お母さんは変なところで恥じらう。わたしはお母さんの口を無理やりあけてスマホで口内を撮影した。フラッシュに文句を言われる。おざなりに謝る。トイレトペーパーを差し出す。「拭けん、さつちゃん拭いてえ」と甘える母の声を聞きながら、口の中の青色に笑いがこみあげてきた。自然界に存在しない色だもの。

「お母さん、これ、人間の体からでてきたらあかん色よ。鮮やかすぎる」と写真を見せる。

佐藤先生がわたしの成績表を机に広げ、今年一年の学校生活について振り返りをはじめ。お母さんは成績表をのぞきこみ、「あら眼鏡忘れた。見えんわ」と佐藤先生にそれをつき返す。佐藤先生はよどみない声が止まる。猫背のお母さんはわたしよりもだいぶん小さく見える。ひとつ咳払いがあり、成績表を読み上げる声が続く。「お母さんから見てご家庭での沙智さんはいかがですか」と佐藤先生が尋ねる。お母さんは待つてましたとばかりに話しはじめ

「さつちゃんにはあたしの介護も家事もやつてもらつて、負担やろうなあつて心配しとつたんです。それまで家ではなんもせん子やつたしね。あたし、薬の効かんあいだは歩くこと一つできんけん」

お母さんが机の縁にひっかけていた杖に触れる。

「不自由させてきのどつかなあて。あたしの障害年金がおりたらよかとばつてん」

「おうちでもお手伝いをたくさんされていて素晴らしいですね。学校でも清掃の時間など真面目に取り組んでいただいています」

「ブルーレット飲んでないもん」

「わかつとるわ」

「だつてうち、マジックリンやん」

「そういうことやなくて」

「だつて、だつて」

「だつてつて子どもんごと言うな」

「子どもはさつちゃんのほうじやん」

「わかつとるわ」

わたしはおかしくなつて、げらげらと声を出して笑つた。トイレトペーパーを二重三重に手に巻いてから、股座に手を差しこむ。拭いてやりながら、ふふ、ふふ、と笑つてしまう。お母さんはされるがまま、泣き笑いのような顔で「ほんとにブルーレット飲んでないから」と言い続けていた。

一週間が過ぎてもお母さんの舌がブルーレット色になつていた原因はわからなかつた。お父さんが病院に連れていくのを億劫がつたからだ。高校の三者面談の日、わたしはお母さんの歯を嚴重にチェックして、ミネティアとマウスウォッシュを大量に口につつこんだ。高校は学年末テストが終つたばかりで浮かれた空気が流れていた。わたしの学年は来月に修学旅行も控えてい

佐藤先生がいつもよりワントーン低い声でほめ言葉を紡いでいく。真面目。優しい。そんな誰にでもあてはまるような言葉たち。お母さんはそれを嬉しそうに聞いている。卒業後の進路のことを尋ねられる。

単純に答えたくなくて、考えるのが億劫で「いまは考えてません」とつき放した返答をする。佐藤先生はめいっばい好意的に解釈してくれる。そうですね、いまはおうちでのお悩みも多いでしょうし、少しずつ解決していつて、三年生になつたら進路も本格的に考えていきましよう。そんな言葉。上滑りして、うまく耳に届いてこない。少しずつ解決と大人は言うけど、解決できる人間なんていない。薬が効く。障害年金が出る。解決の道は明確だ。道は明確なのに、薬がいつから効くのかも、障害年金がいつから受給できるのかも、わたしにはわからなかつた。

わたしが顔をうつむかせたとき、鉄パイプが落ちたような金属音が鳴つた。見ると、お母さんの杖が床に倒れていた。お母さんがあわてて拾おうとして転びそうになつてゐる。「あ、大丈夫ですよ、お母さん」と佐藤先生が拾つてくれた。お母さんの顔

る。お母さんは杖を大仰に鳴らして廊下を歩き、段差のないところをつまずき、階段を亀のような速度で進んだ。すべて難病の症状だった。振戦、動作緩慢、筋強剛、姿勢保持障害。完全に寝たきりではない。夜中に起きたときは意識が覚醒しきれず筋肉に力が入らないから一人で歩けなくなるらしい。日中は多少の距離であれば歩くことができた。すれ違う生徒に奇異の目を向けられる。無駄なボランティア精神で声をかけてくる生徒もいる。友達とすれ違う時には目を伏せて気づいていないふりをした。いつもの何倍もの時間をかけて教室にたどり着いた。教室は暖房が効きすぎるくらいに効いていた。佐藤先生がわたしに気づいて軽く手をあげる。担任とお母さんが「本日はお越しいただきありがとうございます」「いやあ遠かつたです」「ご足労をおかけして恐縮です」「あたしがこんな体じゃなかつたらね、アハハ」と挨拶をかわしあつてゐる。佐藤先生の顔が引きつって、いたたまれなくなる。向かいに座る。ブレザーを脱いでも体に重つたるい温みがまとわりついてゐる。お母さんが机に杖を立てかける。

は紅潮している。わたしもきつと顔が赤くなつてゐる。お母さんが緩慢に姿勢を戻す。トレーナーの首元に青いしみがあつた。

教室を出ると優子が廊下の椅子に座つていた。出席番号がわたしの次で席が近いからたまに話す。優子のとなりには黒々とした長い髪の女性が座つてゐた。優子のお母さんだろう。ブラウスに濃紺のジャケツト、首元に淡い緑のスカーフを巻いてゐる。優子が緊張した面持ちで立ちあがる。「さつちゃん、どうだつた？」と眉を下げて聞かれる。

「別に普通だよ」

「あーさつちゃん怒られないよねえ、あたしバカだからなあ」

彼女はそう言いながら前髪を一房ずつ整える。綺麗に整えられた眉がちらちらと見える。わたしは成績がいいわけではない。わたしが怒られないのはわたしが優等生だからじゃないつてことをこの子はわかつてゐる。特別扱いされてるもんね、と目だけで訴えてくる。その目がするつとわたしのお母さんを見つめる。いやな予感がした。猛烈に。優子の口が開く。あ。小さな音。

「さつちゃんとはおばあちゃんなんだあ」

わざとらしくくらいに目を細めて。この子は知っている。わたしが難病の母親を介護していることを知らないクラスメイトはいない。心優しい佐藤先生が朝のホームルームで事情を話して、手助けしてやってくれと宣言したから。優子のお母さんが慌てた様子で「こら、失礼でしょ」と優子の肩を叩く。目を伏せる。お母さんを見つめる。お母さんはベリーショートで白髪の混ざった髪で化粧つ気がない。しわもたくさんあつて杖をついていて腰は曲がつている。着替えが上手くできなくて、部屋着のベージュのスウェット上下を着ている。手は震えている。うつむいてわたしとも目を合わせない。自分の指を握りしめる。指先は冷たいのに、体は火照っていた。

「お母さんだよ」とだけ返事をして、お母さんの腕をつかんだ。脇の下と肘を支える。行こう、と小さく呟いて歩き出した。杖がかつんと音を立てる。殊更にゆつくりと進んだ。

小さいころに見た夢の中で、お父さんを

でも目に焼きついている。そのAVからは女性のちゃんとアンアンした声が聞こえていた。わざとらしいやつ。反して、お母さんは決してそんな声をあげない。常に声を押し殺している。押し殺してくれないとこちらも困るけど、苦しそうな声を聞いていると心配にもなる。粘膜が潰れたような、ぐちつという音。布団を頭まで引き上げる。聴覚を遮断すると、匂いが鼻をついた。おしつこの匂いとお父さんの煙草の匂い。形容しがたい、性の匂い。隣の布団の振動はこちらにも伝わってくる。はやく終わらないかなと目を固く閉じる。お母さんの姿を思い浮かべたくもないのに思い浮かべてしまった。お父さんは正常位が好きだから、おしめを変えるような恰好をしているんだらう。おしつこを見られるのは嫌がるのにセックスはするんだから、大人はよくわからない。さらによくわからないのは、このセックスの頻度が最近増えているということだった。

昨日、排泄介助をしていると言ったら佐藤先生におおげさなくらい同情された。心配でもなく労わりでもなく同情。わたしは不幸自慢スカウターで言えば結構戦闘力高

本気で殴ったことがある。お父さんはいまの何倍も強大な存在だった。その夢で、わたしは眠っているような起きているようなふわふわとした心地にいて、ふと隣を見るとお父さんとお母さんが同じ布団にいた。うちには八畳の部屋が一部屋しかない。そこに布団を三枚敷いて寝ていた。夢で目を覚ましたわたしはお父さんがお母さんにかかっている光景を目にして、あつと思ふ。お母さんが殴られる、と直感的に感じている。お母さんは確か「痛い、痛い」と言っていて、なにか暴力的な行為が行われているみたいだというのが夢の中の幼いわたしは察する。わたしが飛び起きてお父さんの背中を必死に殴ると、お父さんはあわててわたしに布団をひつかぶせ、「寝とれ！」と怒鳴る。怒られたことに驚いたわたしはかぶせられた布団にくるまったまま、また眠りに落ちる。

そのことを思い出すたび不思議な感覚がしていたのだが、よく考えると、当時小学生にもなっていないわたくしがそんな夢を見るといふのはおかしい話だ。つまるところ、あれは現実だったのだらう。わたしはお母さんとお父さんのセックスの声を聞

めなんだと思う。お母さんも対外的に見れば不幸自慢スカウターカンストだ。難病で娘に介護されてもともと体が弱くて。今後葉が効く保証もない。障害年金を受給できるのは申請から半年後らしい。年金があつたらヘルパーも雇えるし、施設にも入れる。葉が効いたら五年くらいは日常生活にまったく問題はなくなる。いまはそのほさまにいます。お母さんにとってはきつといまが一番番病記で注目されるシーンだ。だれに話しても「辛いよねがんばって」って言ってもらえる。ソーシャルワーカーとかいう職業の人に言ったら「受給までに時間がかかることは社会的弱者にとつて問題です」って記事でも書いてくれるんじゃないかな。

「足」とお父さんの声がする。お母さんがぼんやりした声で「え？」と応じる。

「右足、上げて」

「こつちっ？」

「ちがう、おれから見て右」

「こう？」

「そう、ちがう、左は降ろさんでいい」

「どつちっ？」

「どつちも上げろって」

くたびに、それを思い出す。

「痛い」というか細い声が背後で聞こえる。その声はあの記憶にそっくりだ。わたしが現実に沿って記憶を書き換えたのか、お母さんの声が変わっていないのか。二人の息遣いと衣擦れの音を聞いて、布団をかぶり直す。耳をふさいで震えて眠っていたあのころのような繊細さは失ってしまったが、積極的に聞きたいわけでもない。時折聞こえるお母さんの呻きを聞きながら、そりやあそうだらうなあと他人事のように思う。わたしとお母さんはほとんど体格が同じで、わたしの体はもう発達段階としては成熟している。絶対に想像したくはないが、自分の臆に簡単にお父さんの大きさが入るとは思えない。二人は身長差が三十七センチ以上ある。お母さんが痛がるのは当然だらう。しかしこうして聞いていると、お母さんもその痛みを伴う行為を望んでいるということが不思議でならなかった。

一週間くらい前、わたしが必死にお母さんを立ちあがらせてトイレまで連れて行つたとき、お父さんがトイレでAVを見ていた。スマホの小さい画面を食い入るように見ていたお父さんの姿は一週間たつたいま

隣で振動が大きくなる。その揺れを感じていると、セックスつてお父さんとお母さんなりのボケなんじやないかなと思えてきた。お母さんは明らかに難病になつてからセックスに應じる回数が増えた。もういつそ、ぜんぶに意味があつたらいい。お母さんがお父さんとセックスするのは自分の病気の辛さを紛らわせるためだとか、病気の自分を見捨ててほしくないからだとか。理由があつたらいい。しかしどう考えたつて、そんな大層な理由なんかなく、お父さんとお母さんはセックスしている。娘の隣で。ちよつと頻度が増えている。心なしか激しくなっている。

トイレでAVを見ていたときのお父さんはすごく必死に勃起したものを隠していた。わたしは気づいていないですよつてふりをして、わざとお母さんに「がんばって」つて声をかけた。普段はさつさとしてくれませんかねえつて顔で腕を組んでるだけなのに。お父さんのこともお母さんのことも、心の底から嫌えたら楽だ。でもわたしは中島みゆきのファイトを聞いて泣いた一時間後にB L漫画の濡れ場をかじりついで読んだりする。人には隙がある。わたし

を怒鳴りつけたとしても、その一時間後にこの人はトイレで一人さびしくシコつて寝るんだなあって考えると、憎むに憎めない。だからわたしは心の底からこの家から逃げたいとは思えないのかもしれない。悲しいことに、現実には悲劇なんてもいはない。

振動がやんだ。するつと布団を抜け出す。酒の匂いにまじって、青臭いような匂いがする。お父さんとお母さんのほうは見えない。ユニットバスに入って扉を開める。トイレと風呂が一緒になったっているから床が水浸しだ。便器に座ってスマホを取り出す。ズボンとパンツをずり下げる。スマホでSNSのアカウントを開いて、「眠れない泣」と投稿した。同じクラスの話したこともない人からいいねが来る。泣いてない。むしろいいねの通知を見てにやけていた。

朝六時三十分のアラームで起きて、となりを見るとお母さんがいなかった。一晩起こされなかったから体が軽かった。明け方頃、一人で起き上がるお母さんを夢うつつで見えた気がする。振り返ると、八畳の一

角にある台所ともいえない狭いキッチンスペースにお母さんが立っていた。わたしは布団で毛布にくるまったまま、お母さんの背中を呆然と眺めていた。溶かした卵にスプーン大盛りの砂糖を入れている。料理するお母さんを見たのは半年ぶりだった。首元にはもう青いしみはついていない。よれたスウェットに着古した半纏なのは変わらな

い。「あ、起きたん？ 机だしといてくれる」お母さんが振り返って言う。ワンルूमのわが家にはダイニングテーブルなんてものはない。食事のときは折り畳みテーブルを出す。「おかあさん」と思わず声をかけた。起きられたんやとか、元気になったんとか、言葉が浮かんだ。口から出てきたのは違う音だった。

「卵、だし巻きがいい」
「ええ？ もう砂糖入れたよ」
「どうせお父さんが食べるでしょ、わたしの卵だし巻きにして」

わたしのわがままに、お母さんは「めんどくさ」とぼやくつつ白だしの瓶を取りだしてくれた。この家のカーテンは年中閉めざらされている。流し元灯の青白い光の下に

立つお母さんが眩しかった。卵焼きには卵の殻が混じっていた。この日ばかりは許した。

その日以来、お母さんの調子はぐんぐんとよくなっていた。お母さんによると一週間ほど前から薬が変わり、それが体に合ったのだとか。もう日常生活に支障はなくなると思えますと主治医の太鼓判つきだ。お母さんの痰が青くなっていた原因もわかった。主治医に定期診察で相談したところ「着色の錠剤を飲んだときに嚥下できなくて、着色剤が溶けだしたんでしよう」と三秒で返答がきたらしい。そしてお母さんの症状が薬でほとんど治まったころ、障害年金の受給が決まった。

受給決定の発表はわが家の折り畳みテーブルを囲んで行われた。お父さんがもったいぶって年金証書をテーブルに置く。わたしとお母さんは大げさに拍手をした。やつた、やつたと声に出してみたり手を握り合ってみたり、年金証書を三人でのぞきこんであほみたいな喜び方をした。月十万円。証書の支給額の欄にはその数字が書かれていた。わが家のひと月の世帯収入の半額だ。お父さんは年金事務所に通った苦勞を

恩着せがましく語った。わたしとお母さんは「やつと解放されるわ」と憎まれ口をたたいたり、「使い込んだらだめやで」と冗談を言ったりした。薬が効いて。障害年金が出て。解決の道がばあつと開けた気がした。こんなに簡単なことだったのかと呆気なくなるくらいだった。三人とも終始浮かっていた。

年金の振り込みがあったのはその三週間後だった。冬の底にひびが入りはじめていた。

「お母さんさあ、このご飯何日目？ ちゃんと冷蔵庫入れたん？」

「もう覚えとらんけど、冬やし腐らん腐らん」
「いやもう腐つとおし。色変わつとるの見えんの？ 匂いで気づかんの？ しゃもじで混ぜたらさあ、カビ生えとるやん」

「老眼やもん」
という問答は五回目だった。お母さんはいつも「あたしはつかり悪者にして。空が青いのもポストが赤いのもあたしのせいね」と泣くか「そがん言うない食べんでよか」と逆ギレするかのどちらかだった。今

日は泣かれた。ベリーショートで皮膚炎がひどい赤い顔で泣かれると本当に子どもをいじめているような気になる。泣きまねではなく本気で涙を流すのだから体を張っている。

お母さんが家事できなかったときにはわたしが代わりをしていた。お母さんは病気のあいだわたしに感謝しつつも「あたしの苦勞のわかつたやろ」なんてにやついていたけど、わたしのほうがよっぽど勤勉な主婦だった。お母さんが病気になる前のうちの献立には週三でインスタントラーメンが組み込まれていたし、洗濯は二日に一回、掃除は月に一度していれば偉いほうだった。なによりお母さんには衛生観念がなかった。

空がこんなに青いのも、電信柱が高いのも、郵便ポストが赤いのもみんなあたしが悪いのよと語呂よく泣くお母さんをほっぽって惣菜のコロッケだけ食べる。ばさばさしている。牛肉入りと書いてあったから買ってきたのにほとんど芋だ。お母さんがあまりにしつこいので「うるさい」と怒鳴る。親に叱られた子どもみたいに縮こまって枕を濡らしながらまだ「ポストが赤いの

も……」と唱えつづけている。びんばーんとチャイムが鳴る。出るとお父さんだった。

お父さんは一週間前から家の鍵をなくしていた。外から帰ってきたお父さんからは冬の夜の匂いがする。コートの表面にはまだ冷えた空気が残っている。お父さんは手に提げていた紙袋を布団に放った。わが家では布団は基本的に敷きっぱなしである。お母さんには見向きもせずテレビの電源を入れる。バラエティ番組が流れだす。わたしはお父さんの近くに寄っていつて「これなに？」と聞いた。紙袋にはビツクカメラのロゴが入っていた。いやな予感がした。「なん買ってきたん？」と開けようとすると。手で邪魔された。開封してはいけないらしい。「カメラ」と端的に答えが返ってくる。カメラにしては袋が大きい。絶対に問いつめなければいけないと直感する。お父さんが仕事用の鞆から煙草を取り出す。年季の入ったジッポライターで火をつける。あえて明るいテンションで乗っつてみることにした。

「わたしも最近カメラ興味あるんだよねーなに買ったん？ 大きい袋やん、ほかの部品も買った感じ？」

「がんばって目をキラキラさせると」お、興味あるん」とお父さんはスーツのまま袋を開けはじめた。中身も嚴重に箱にしまわれている。その側面には本体の写真がプリントされている。

「デジタル一眼レフのズームレンズセット。望遠レンズ三百ミリで画角も探してたのにびったりやっただけ買った。三脚も持ち運びしやすいやつがあるって店員さんに言われて。仕事でカメラ使うやろ、ちよんどのいいし買つとちよん思うて」

一眼レフに望遠レンズに三脚！ 買つちやっただけやねえよ！ とパンチするお気持ちだったが、仕事用と聞いて安心した。

「あ、仕事用ってことは経費で落ちるんや。焦った」

「いやこれは私用でも使うから自腹」

「は？」と声が重なる。わたしとお母さんだった。お母さんががばつと起き上がってこちらにやってくる。普段からは考えられない俊敏な動きだった。

「私用で写真撮ることなんてないやろ、絶対ないやろ。いくら？ いくらしたん？」

問い詰めたのはわたしだった。お母さんはこういうときにお父さんに強く出られない。

いている。子どものころ空き地だった場所は新興住宅地になっている。小さな神社を通り過ぎて、信号を渡った場所にはラブホテルがある。最寄りのスーパまではあと一キロほどだ。ラブホテルはよく聞くお城みたいな外観じゃなかった。灰色と薄ピンクの武骨な建物で、あちこちにひびが入っている。サービスタイルののぼりは雨ですっかり文字がにじんでいる。

利用案内の看板が信号機に隠れるように立っている。十八歳未満のご利用はご遠慮いただいています。その看板の下に、お母さんはいた。傍らに自転車横倒しになっている。たったいま倒れたかのような横座りでお母さんは泣いていた。

「なにしてんの」

息が白く凍る。しゃがみこむ。お母さんが倒れているのは道路わきの芝生の上だった。人工的な芝生には霜が降りている。着古したスウェットがじつとりと濡れている。のが見えた。お母さんが泣きまねをする。

「起き上がれんくなつたあ」

両手をのばしてくる。手をつかむ。お母さんの手には泥がついている。黄色のジャンパーの裾が茶色く汚れている。スウェット

い。お父さんはテレビとわたしたちを交互に見て、煙草を吸う。わたしはテレビを消した。「あ、なんすつとか！」とリモコンを取りあげられる。テレビがつけられる。芸人の声が部屋に響く。いくらだったのかともう一度聞いづめる。お父さんがテレビに目をやっただけまふ一つと煙を吐く。

「十万」

またしても端的な答えだった。じゆうまん。思わずオウム返しする。障害年金の月の支給額だ。仕事で広報に関わるようになってきちんとした撮影をしなければいけないとか、趣味の一つももっていないと人間としてよくないとか言い訳が聞こえる。仕事なら経費で買つてほしいし、年収三百万に届いてから文化的な生活を求めてほしい。

「そいはあたしのお金やん！」

お母さんが枕を握りしめて言う。その枕には茶色いよだれのシミと青い点々がまだらにある。お父さんはぶすくれた顔でテレビを見つづけている。普段は低俗だとバカにしているくせに。先ほど泣いていたなごりでもまだしゃくりあげるお母さんの声と芸人の笑い声だけが部屋に響いている。どうせすぐ飽きて使えないカメラにそんな

トの膝の部分には血がにじんでいた。助け起こそうとするが、手を引く張るだけでは立ち上がれない。介助をしていたときのように脇の下から背中を腕を回す。

「お母さん、治つたんちやうの」

「治つてない、薬で症状が抑えられてるだけ」

「それ治つてるやん」

「ちがうつて、この病気は死ぬまでつきあう病気なの」

「症状がないんやろ？ 治つてるやん」

「でも今日転んだし」

「お母さん病気ちやうくてもこけるやん」
「病気やもん、病気やから転んだんやもん」

お母さんの足はずつと震えている。もうそれが寒さのせいなのか病気のせいなのかわたしにはわからない。お母さんは病気になる前から、持病があるわけでもないのに毎週病院に行っていた。清掃のパートで動作が遅いと毎回怒られると愚痴っていた。頭痛と倦怠感に毎日悩まされていた。できたあざを必ずわたしに見せたがった。わたしもお父さんも難病だと医者に言われるまでは「老化やな」「ほんど鈍くさい」で済

大金使うなんて。うちが貧乏で苦勞してると知つていくくせに。お母さんの十萬円が決まったとたんにこれだ。文句はたくさんあった。でも体は固まつてしまつていた。どこか予定調和のような、わたしはこの展開を予想していたような気持ちがあつた。ホームルームでわが家は「お母さんの介護で大変なおうち」だと紹介された。問題はお母さんの難病だけつてことにはなかった。そうじゃなかった。お母さんもお父さんもとも問題な人だった。病気のあいだは忘れていられたそのことを、思い出した。お父さんはテレビの芸人から目を離さなかつた。ちつとも笑えなかつた。

翌日、夜九時を過ぎてもお母さんが家に帰つてこなかつた。近所のスーパに買い物に行くのでかけて、五時間が経つていた。スーパまでは徒歩二十分の距離だった。お父さんはご飯を用意してないことに拗ねて外食に行き、わたしだけで探しに行くことになった。自転車置き場から自転車がなくなつていた。お母さんが乗つていったのだから。スーパまでの道を歩き出す。途中のコンビニまでの道には点々と街灯がある。街灯には虫の死骸がこびりつ

ませていた。抱き合うようにして立ち上がらせる。お母さんが事情を説明しはじめた。自転車は置いていくことにした。肩を組むようにして歩き出す。ラブホテルのピントのライトが煌々と灯つている。お父さん、この姿を撮つてくれないかなと思つた。飽き性なお父さんの性格を考えれば、十萬のカメラが今後役に立つ機会はそう多くないだろう。

「月十萬あつたらさあ、わたしも修学旅行いけてさあ、お母さんも施設入れるんよな」

障害年金がでたら、と夢想していたことだった。治つていないのなら入る選択もあるはずだ。お母さんは「施設は絶対入らんからね」と意固地になつた。

「入つてよ」

「入らん」

「入れや」

「やだ」

「なんで」

「さつちやんがおらんやん。ほかの人におしつ拭かれるなんてやだ」

「わたしも拭きたないわ」

「やだやだやだ。一生さつちやんに拭いてもらうんだもん」

「垂れ流しとけ」

ラブホテルからカップルが出てきて、わたしを避けるようにして追い越していった。お母さんがわたしの腕を強くつかむ。湿疹の飛んだ顔は赤い。赤ちゃんみたいだ、と前にお父さんがからかっていた。いつそ、赤ちゃんならいい。弱いことは希望だ。でもお母さんの弱くなつていく姿に希望を見出すことはできなかった。お母さんがよりかかってくる。わたしは心底、お母さんの体の重さに打ちのめされていた。

修学旅行の振り替えて午後は休みになり、昼に下校できた。修学旅行は来週に迫っていた。積立金を払っていないわたしは行けない。お母さんにおむつ代わりの吸水パッドを買ってきて頼まれていた。お母さんは転んだ日以来極端に動きたがらなくなつた。医者にリハビリとして歩きなさいと言われても散歩すらしない。と思えば「少しは歩かないと体力落ちるから」と夜中に突然アパートの廊下を往復しはじめたこともある。階段を使わないタイプのダイエッターと同じだ。ドラッグストアで吸水パッドを黒いビニール袋に入れられて渡される。店を出た。比較的暖かい日だった。

た。正面から目を合わされる。左右の二重幅が違ふことばかりに目が行く。

「……確かにこれは実際に介助を手伝うとはできない。でも例えば進学先の大学に配慮してもらえようと言うとか、国の補助制度を調べてみるとかはできる。いまは介護する子どもに対する支援団体もあるし、スクールカウンセラーの先生ともう一回話してもいい。もつと大人に頼つていいんだよ。諦めないでほしい」

いまにも手を握つてきそうなくらいの熱弁だった。佐藤先生はわたしの担任になつてすぐ、親の衛生観念がおかしいこととお昼ご飯をかうお金をもらえないとか、わたしの困りごとを察知して声をかけてくれた。スクールカウンセラーにつないでもらつたこともあるし、奨学金を紹介してもらつたこともある。真面目な先生だ。カウンセリングは今年に入ってスクールカウンセラーが非常勤の人に代わつて行かなくなつた。奨学金は「借金だ、恥ずかしい、おれが苦労させていると思われればやらないか」の三拍子でお父さんに許してもらえなかつた。なにも解決しなかつたじゃないかと佐藤先生を責めたいわけじゃない。その優しさは本当だ。わたしは佐藤先生に笑いかけた。

春が近づいている。透き通つた光に目を細めたとき、自転車置き場の隣の喫煙スペースで煙草を吸う男性と目が合った。「うわつ」と声が出た。相手もこちらに気づく。スーツの男性。佐藤先生だった。ついてない。うちの高校では登下校時の買い食いも禁止されているのだ。コンビニも飲食店もドラッグストアもダメ。理由はよく知らない。探り合うような空気が流れる。佐藤先生が深く煙草を吸いこんだ。

「煙草バレたら教頭に嫌味言われるからさ、黙つててくれない？」

急いで首を縦に振る。佐藤先生が眉間にしわを寄せて、斜め上を向く。ふーつと吐き出す。人が煙草を吸っている姿を見るのは好きだった。お父さんの煙草は許せないけど他人なら許せる。

「共犯な」

自転車の籠にスクールバッグをいれる。教科書や資料集が詰まつたバッグは重い。生まれたての赤ちゃんより重い。鍵をさしてそのまま帰ろうとしたら、「修学旅行、積立金がなくても行けるかもしれないんだ」と声をかけられた。サドルにまたがる。スタンドは立てたまま。自転車にはお母さんが転んだ時の泥がまだついていてる。

た。

「お母さんの病氣、治つたんです」

タイヤをゆるく回して、ブレーキを握る。甲高い音がする。悲鳴みたいな音。

「いや難病やから死ぬまでつきあつていくことに変わりはないんですけど、薬が効いて日常生活に支障がなくなつたんです。病院の先生は働くこともできますって言うくらい。もう介護も家事もせんでよくて。障害年金つていうのももらえるから、いままでもたいな貧乏もせんでいい、つてなつたんです。すごいじゃないですか。ぜんぶ解決ハッピーエンドじゃないですか」

でもね、先生。そうつないだ言葉が自分で思つていたよりも濡れていて、わたしはちよつと動揺しながら続ける。

「わたし、なんでやる。いまのがずつと、苦しいんです」

お母さんは先週もひとりで出かけて転んで怪我をつくつてわたしにそれを見せびらかした。わざとじゃないかと思うくらい、ずるむけの傷だった。腕と足には青あざがいくつもついていてた。大人になるほど人間は怪我をしないんだと思つていたのに。大きい絆創膏を貼つた。消毒液が沁みると騒いでいるお母さんをなだめながら、わたし

「あまりお金がない生徒のために三月末まで猶予しようつて学年会議で決まつてな。親御さんの了解がないと決められないと思うけど、話だけしておきたくて。介護のこととも家事のことも、三者面談で聞いてもつとやつてやれることがあつたんじゃないかかって考えてたんだ。修学旅行のあいだだけは苦しいこと忘れのでもいいんじゃないか？」

スタンドを立てたまま自転車をこぐ。車輪の回る音がする。電気起こすときにやるやつ。この自転車はどこにもつながつていないから非生産的な行為だ。先生が停めてあるバイクによりかかる。

「修学旅行のこともしようがないつてすんなり納得しちゃつただろ。もつと相談していいんだよ。喧嘩したつてだけでぎゃんぎゃんおれに言つてくる生徒もいるんだから」

「先生に相談してもなんにも変わんないですよね？」

ブレーキを握る。古い自転車は錆びついていて、ブレーキをかけるたびにきいいて耳障りな音を立てる。わたしは「あ、すみません」と謝る。佐藤先生は立ちあがつて、煙草を灰皿代わりのバケツに入れた。も痛かつた。どこも怪我していないのに、ずつと、痛かつた。

昨晩はわたしが勉強している横で「話さうよお」と子どもつぼく口をとがらせて、何時間も何時間もお父さんやわたしの悪口を言つた。お父さんと結婚しなければ、わたしを産まなければ。お父さんの散財癖がなければ。お母さんの口から出てくるのはわたしがこの十七年間ずっと聞かされ続けていたことだった。お母さんは家計簿をぐるぐる塗りつぶしていた。ボールペンで。家計簿は真つ黒なページばかりだった。わたしはそれを見るたびに胸が苦しくなつた。ごめんと謝ると、あんたが謝つたつてどうしようもなかやろ、とお母さんは馬鹿にするみたいに言つた。

「修学旅行は行きません。うち、貧乏やもんな」

わたしはブレーキから手を放して隣を見た。佐藤先生は再びバイクにもたれかかつてわたしを見ている。笑つている。口角が上がつている。佐藤先生はたぶん自分が笑つてること気づいてない。去年の担任の先生もスクールカウンセラーの先生も笑つていた。薄い、安心していいんだよみたいな微笑み。辛いつてこぼしたとき、人

はなぜか、たいていこの表情をする。佐藤先生はたぶんたくさん勉強してくれた。助けようとしてくれた。安心して。辛かったでしょ。話していいんだよ。大人を頼つて。たくさん声をかけてくれた。でもこの人は親の代わりに修学旅行のお金を出してくれるわけじゃない。話して楽になるなら、こんなにややこしくはなっていない。佐藤先生は黙ったままだった。わたしは自転車のスタンドを倒して、ベルをりんと一回鳴らした。バッグの位置を調整して、転ばないようにこぎます。自転車はタイヤがパンクしている。

「さつちゃん、あのね、あのね、今日一人で病院行ってねえ」

お母さんの背中がわたしの背中よりちよつと広い。お母さんが話しててもわたしは返事をしなかった。明るい声を精一杯暗くしようとしているのが伝わってくる。胸の中に焦りのようなノイズが走った。お母さんは唐突に言った。

「脳腫瘍見つかつたの」

「はあ？」と声が出たのか、嘘やんとツツコんだのか。どちらかわからないと思つたけど、どちらもしないかつた。脱力して

まな動きだが四つん這いになるところまではいけた。声をかけながら片方ずつ足を布団につける。壁に手をついてもらつて、壁を伝うように立ち上がらせる。後ろや横から支える。十分ほどかけてようやく立ち上がった。疲労していた。心も体も。冬なのに汗みずくだった。お母さんの肩を横から支える。「壁から手離して、行くばい」と声をかけながら一歩踏み出す。魚の腐つたような匂いがする。お母さんは齒槽膿漏で常に口からひどい匂いをさせているけど、自覚していない。ちよつと支える手が緩んで、一歩目でお母さんがバランスを崩した。もう片方の手をのばす。届かない。支えようとした腕が体重を支え切れない。肩を組む体勢だったから、わたしも一緒に倒れこんだ。仰向けだった。お母さんは目覚まし時計でしたたかに頭を打つたようだ。狭いワンルームで二人が倒れたものだから、箆箭の上の段ボールが落ちてきた。わたしの頭に直撃する。顔からどかして見ると、お母さんが昔に買った健康器具だつた。小型の安っぽいフィットネスバイク。首を痛めた。お母さんも隣で別の段ボールの下敷きになっていた。わたしが隠していたB.L本たちをいれた段ボールだった。お

言葉が出てこなかつた。腫瘍は良性か悪性かまだわからないやけどね、これから入院して検査する必要があるってね。悪性やったら手術せんといけないらしい。怖かあ。お母さんの全然怖いと思つていなさそうな声が耳を抜けていく。

「ほら、あの転んだやつも病気の症状やつたんだよ。脳腫瘍つて歩けなくなつたり片方の手足が麻痺したりするらしいか」

勝ち誇つたような声だった。気づいたら胸を押さえていた。体を貫くみたいに痛みがあつた。背中にあるお母さんの重さ。目の前がゆつくりと暗くなつていくような感覚があつた。なんでやねんって明るくツツコめたらいいんだってわかつていた。難病の次は脳腫瘍かいつて。お前なんで嬉しそうに言つてんねんって。コントみたいに。できなかつた。気が塞いでいく。息が浅くなる。

時計は夜の十時を指していた。お父さんはまだ帰ってきていなかつた。わたしは外食して帰ってきたばかりだった。帰つてくるとお母さんはうたた寝して起き上がれないと布団でもがいていた。トイレに行きたいというので介助をした。完全に治つたわけじゃないから、たまにこういうことがあ

母さんにバレルるまえにどかそうとするが、健康器具が重くてすぐには動けない。段ボールの下から「もれ、もれる」と声がする。体が重くて手をのばせなかつた。お母さんが動いた拍子にB.L本たちが段ボールからどさどさとしてくる。布団の上に放置されていたリモコンに一冊が当たつたらしく、テレビがぼつとつく。頭が痛くなるくらい大きい音量だった。お母さんがリモコンに手をのばすけど届かない。顔をあげる。隣でお母さんもテレビのほうを見たのがなんとなくわかつた。

小島よしおが『でもそんなの関係ねえ！』と海パン一丁で叫んでいた。

ブワツ、と。その瞬間に起こつた感情はどうにも表現できない。小島よしおの声だけが流れる部屋でお母さんと目を合わせた。目やにだらけの目。一瞬の沈黙。体の力が抜けた。笑いが出てきた。口が知らぬうちに大きく開いている。体の内側からでてくる笑いを抑えきれない。肩が震える。テレビの中の観客の笑い声よりも大きい声が出てくる。隣を見るとお母さんも笑つていた。最近病気で表情の乏しいお母さんしか見たことがなかつた。あははと腹の底から声が出ているのがわかる。笑い声の合

つた。そして立ちあがらせようとしたとたんの、発病報告だった。

背中合わせのままお母さんとわたしで腕を組みあう。体育のときにやつた立ち上がり方だった。今日は背中に体重をかける。人という文字は人と人が支え合つてできているのですの形。全然立ちあがれない。腕だけは離れない。お母さんの踏んばる力が弱すぎるらしい。支え合つて片方だけがなんとかしようとしてもできないものだ。後ろから抱えあげることにした。単純に後ろから持ち上げて、近くの壁に手をつけて立ちあがつてもらう方法。後ろから手を脇の下に差しこむ。猫を持ち上げたらだらつて伸びるみたいに、お母さんもだらつと伸びている。お母さんが膝を立てようともがいているあいだに腕が重さに耐えきれなくなつた。尻餅をついたお母さんに文句を言われる。「そんなら一人で行けや」と言い返す。お母さんが一人で立つてトイレに行けるならわたしもお母さんもこんなに苦労はしてない。そうわかつていても、イライラが抑えられなかつた。発病報告がまだ頭に残っていた。

次は正面から試す。正座から前傾姿勢、四つん這いになって立ちあがる方法。のろ

間に「もれ、もれた」という言葉が挟まる。アンモニア臭が部屋に充滿する。段ボールの下から湯気が立ち上るのが見える。わたしの布団にもおしっこが沁みってくる。

『でもそんなの関係ねえ！』

健康器具の下敷きになつたまま、また笑う。笑い上戸の酒飲みになつたみたいに、すべての事象に笑つた。わたしのB.L本たちがお母さんのおしっこでふやけている。

『はい、オッパッピー！』

顔をあげる。テレビ画面の明るさにめまがする。夜のバラエティ。一発屋傑作選。小島よしおでいまこんなに本気で笑つてるの、きつと、わたしたちだけだ。

びんぼーんと玄関チャイムが鳴る。さつちやーんと叫ぶ声があった。お父さんの声だった。まだ鍵は見つかつていないらしい。健康器具を無理やり体からどける。足が痺れていた。電気敷毛布のコードに引っかかつて倒れた。正面にあるものに手をつく。腕の痛みとともに起き上がると、押し入れの襖が見事に真ん中から破れていた。ヤバいとわかっているのに、笑いがこみあげてくるばかりだった。玄関の鍵を回す。扉が開いて、冷気が舞いこんでくる。お父さんはにこやかな笑顔だった。

動的な瞑想

稲田浩

プールが好きだ。POOLと英語で表記したときの字面もかわいくて素敵だと思う。

例えば小学生の頃、親の指示により毎週通わされたスイミングスクールは、苦痛以外の何物でもなかった。スクールに通う日が近づくにつれ毎週いづも気が重くなり、その分終わって出るときの解放感も格別だった。スパルタというほどではないにしろ、なかなかハードなカリキュラムだったと記憶する。

そんな苦い思い出ともにあるプールだが、いつの頃からか人生の相棒とも言える存在に様変わりしていた。プールにはそれぞれに個性がある。大きめから小さめ、競技用に遊戯用までといろいろあるが特にこだわりはない。特定のプールではなくプールのなるもの。むしろ概念としてのプールが好きなのかもしれない。

『A LONG VACATION』(大瀧詠一の名盤)のジャケットで有名な永井博のイラストのように、ある種理想化されたリゾート地のプールももちろん好きだ。かつて南の島で過ごした休日

のホテルには、必ずそんな素敵なプールがあった。晴れ渡った空の下、仰向けに浮かんで椰子の木などの景観に縁取られた三六〇度の青空を独り占めているときほど幸せを実感したことはない。きつとそんな感じでプールにぶかぶか浮かんでいるときに、自分にとってのプールへの価値観がぐるぐると反転したのだろう。

ここ数年はおよそ週に二回、近所にある区民プールで各一キロを小一時間ほどかけてゆつくり泳ぐようにしている。肩まで水に浸かると、体重はほぼ十分の一まで軽減されるという。重力からの解放とともに身体が浮揚する。スイミングするようにリズムカルに腕を振って前へ前へと泳ぎ進めていくと、日常の雑事が洗い落とされて後方へ押し流されていくようだ。

動的な瞑想状態とでも言うのだろうか。ただぼんやり、考えるとも無しに思いを巡らせながら水面をゆつたりと泳いで進む。普段かけている近視眼鏡を外して裸眼にゴーグルのため、周囲の様子はぼんやりとしか見えていない。余計な情報が遮断されたフィルター

ーバブルの中にいる。適度な運動としての負荷もあって、意識はクリアでありながらフローに。そんな時、フワフワとアイデアが湧いてきたりする。

大切なことは全てプールで決める。なんて言いきってしまうと大げさだが、プールで泳ぐのは自分にとってかけがえのない大切な時間だ。今作っているフードカルチャー雑誌『ROCI』のアイデアも泳いでいるときに生まれたし、企画が定まらなかつたり方向性を決めかねているときは泳ぎながらの脳内「編集会議」がプールで催されることになる。

さてこのコラムのネタをどうしよう? と思索したのもやはり泳ぎながらである。いつも最良の答えを出してくれる心強い味方。相棒としてのプールは持ち歩けないが、世界中のあらゆる場所に遍在してくれているのが何よりの長所だ。

Profile

いなだ・ひろし

編集者。ロッキング・オン勤務。『EYESCREEN』編集長などを経てライズプレス株式会社を設立。現在はフードカルチャー誌『ROCI』webメディア『ricepress』の編集長。

「さつちやん、カメラ買って来た!」
勢いこんで言われる。手にはビックカメラの紙袋があった。

「こないだ怒ってたから。二人のぶんも同じやつ買ってきてやっつたばい」

わたしは立ち尽くしたまま、体の力が抜けていくを感じた。玄関の壁によりかかり、ずるずると座り込む。お父さんがわたしに袋を押しつけて部屋にあがる。受け取った袋はどつしりと重い。中をのぞきむと十万のカメラのセットが入っていた。お父さんのカメラと合わせて合計二十万。ははは。緩んだままの音が出てくる。そこに怒ってんちやうわ! と怒る気力もでてこない。

お父さんが部屋を見て、「はあ? なんこれ」と呆れている。わたしも足の痺れをこらえながら近づく。アンモニア臭は消えないまま漂っていた。部屋の入り口から見ると見事な惨状だった。布団の中心でお母さんがわたしのBL本に埋もれてテレビを見ている。音量は下がっていない。「リモコン壊れた」とお母さんが布団にリモコンをぶつけている。その顔がこちらを見る。お母さんはお父さんの目に映したその瞬間に、脊髄反射みたいに、

「おかえり! 今日病院行ってね、脳腫瘍が見つかったよ!」

と満面の笑みで言った。隣でお父さんが「はあ?」とバカでかい声を出す。

「ほらあ、あたしがおかしかつたんじゃないでしょ」

続けられたお母さんの言葉に今度こそぶつと吹きだしてしまった。

「嬉しそうに言うな」
「また病気なつたんか」

わたしとお父さんが同時に言う。「まず心配してよ」とお母さんがむくれる。三人で声を立てて笑った。窓の外がぱあつと一瞬明るくなった。テールランプの赤が窓を照らして、すぐに消える。

お父さんは部屋でなにが起こったのかを聞きたがったけど、先にお母さんどうにかしてと押しつけた。お父さんは軽々とお母さんを抱えあげてユニットバスに連れていく。車の走行音がまだ聞こえている。襖は破れ、部屋には段ボールと健康器具とBL本が散らばっている。テレビの音量は上がったまま。お母さんの布団には濡らしたシミが広がっている。青い点がいくつか散っていた。鮮やかな色。ブルーレット詰め替え用の液を散らしたみたい。わたしは

部屋の入り口でそれを眺めた。ふふ。小さく漏らす。服が乱暴に洗濯機に入れられたときのボタンがぶつかかる音が聞こえる。「さつちやんが寝てから、ね」とお母さんの声量を抑えた甘い声。

「いま」

「あとで」

「いまがよか」

「聞こえるからダメだって」

風呂場での会話に聞き耳を立てていると、テレビがCMに切り替わった。

林修が「いつやるか? 今でしょ!」とドヤ顔で言う。

奇跡じゃん! と思わず爆笑する。自分の布団にもぐって毛布を二枚ひつかぶった。布団の中で笑いを必死にこらえる。なんでこんな小さなミラクルにちよつと救われたような気になっているのか、自分でもわからない。現実はなにも変わっていない。でも、この笑いだけは、手放しちゃういけないとわかっていた。真つ暗な視界の中で、あの青い点はまだ鮮やかだ。壁にぶつかるような音がする。制止の声はもう聞かえてこない。笑いの波はまだ収まっていない。テレビはもう次の番組に移り変わっている。だれかの笑い声が聞こえる。